

文学教材における語彙の指導に関して ——教材「羅生門」を例として——

長崎靖子

キーワード・文学教材 国語教育「読み」 語彙指導 「羅生門」 全然

要旨

本稿では、文学教材における語彙の指導を、高等学校の教科書「国語総合」に収載された「羅生門」から考察した。今回「羅生門」の中で注意すべき語として、副詞「全然」を取り上げた。「全然」は、現代では否定と呼応するという規範意識があるが、明治から昭和前期の用例を見る限り、「完全に」や「全く」の意味で肯定文にも使用されており、「羅生門」の用法もこれにあたる。

「全然」に関しては、「全然大丈夫」や「全然いい」といった近年の「「全然」+肯定」の使用が問題視されるようになったことで、語法に関して通時的な研究が数多く行われるようになり、もともと否定と呼応する副詞という規範はなかったことが、明らかにされている。しかし、この事実は教材研究の中にあまり生かされておらず、「羅生門」の「全然」の用

法にも注意が向けられていない。

「羅生門」は「読み」の教材としての意識が強いが、「読み」を学ぶ上では、まず「羅生門」が書かれた当時の語の用法を踏まえておくことが必要と考える。

一 はじめに

本稿では、文学教材における語彙の指導法に関し、考察を試みる。今回取り上げるのは教材「羅生門」（これ以降教材として考える場合は「羅生門」それ以外は「羅生門」とする）である。通常、文学教材は「読み」を主体とした指導が行われるが、本稿では「羅生門」に使用される「全然」を取り上げ、文学的な「読み」を学ぶ上で、「羅生門」が書かれた時代の語の用法や意味を知る重要性を示す。本稿の内容は、次のような流れで進める。

①国語の分野における学習指導要領の改訂

②高等学校教科書「国語総合」の役割

③文学教材としての「羅生門」の先行研究

④語彙教材としての「羅生門」の先行研究

⑤「羅生門」における「全然」の用法

⑥「羅生門」における「全然」の指導法

「読み」を主体とした文学教材の中で、いかなる語をいかに学ぶことが必要かを探るのが、本稿の目的である。

二 学習指導要領改訂の方針

平成二十一年三月の学習指導要領改訂により、国語の分野では、

言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。

という点が強調された。これに応じて、学習指導要領には国語に関する改善の具体的事項が、中学校・高等学校の段階ごとに示された。高等学校では、国語の各種類の教科書ごとに、それぞれの役割が述べられている。

今回扱う「羅生門」が収載されている「国語総合」に関し

ては『高等学校学習指導要領解説 国語編』の中で、

(ア)「国語総合」は、現行の「国語総合」の内容を改善したものとする。実社会で活用できる国語の能力を身に着けるため、話すこと・聞く事、書くこと及び読むことの学習が総合的に行われるよう、内容を改善する。その際、特に、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、話したり書いたりする能力を育成することや、わが国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成を通して、感性や情緒をはぐくむことを重視する。

三頁

とある。この改訂を踏まえ本稿では「羅生門」の語彙の指導法について考察する。

三 「羅生門」の教材としての意義

芥川龍之介著『羅生門』（大正四年 一九一五）は、昭和三十一年（一九五六）年、高等学校国語科の教科書に採用され、以来、高等学校における文学教材として、ゆるぎない地位を保ち続けている。

「羅生門」は、高等学校の国語教材の中で、現代文「小説」に位置づけられる。本作は、教材としての分量が適度で、また、登場人物の心理の読み取りやその主題を考える、いわゆ

る「読む」指導法を実践できる格好の教材である。学習指導要領には、読書の指導教材として、

教材については、我が国において継承されてきた言語文化に親しむことができるよう、長く読まれている古典や近代以降の作品などを、子どもたちの発展の段階に応じて取り上げるようにする。

とある。「羅生門」は、まさにその意を汲んだ作品であり、高等学校の「読み」の教材として不動の地位を占めている。

『羅生門』には、膨大な研究論文があり、その中には、文学教材として「羅生門」をどう扱うかという論文も多数みられる。関口安義（一九九九）では、本作品の教材的価値を「これが完成度の高い短編小説だということにある（一六三頁）」、そして「四百字詰原稿用紙で十六枚、教科書に全文採用する小説として、長さの点でも申し分ないのである（一六六頁）」と、教科書に収録しやすい教材であることを指摘する。また、「読み」を学ぶ文章として「起承転結の構成」がはっきりしている点、「学習者の問題意識を喚起させ、批評意識の養成に役立つ」という点などを述べ、「羅生門」の教材としての価値を評価する。

田中実（一九九六）では、「羅生門」の教材としての価値を「芥川の小説の主眼は登場人物どうしの対立（ドラマ）であるより、そうした人物を〈語り手〉がどのように捉え、批

評していくのかに特徴があると私は考える（四〇頁上段）」と、物語を客観視する〈語り手〉の存在から考察を行う。その他、門に張り付いた「蟋蟀（きりぎりす）」が何を表象するか、また最後の文脈「下人の行方は誰も知らない」に焦点を当てた論考等、文脈の中で暗示される事柄についての細かい研究も見られる。¹⁾

このように「羅生門」は、「読み」という観点からの教材研究が多いが、近年「羅生門」の語彙に注目した研究も増え始めている。

四 「羅生門」に使用される語彙の先行研究

「羅生門」の語彙研究として、甲斐睦朗（一九七三）「教材研究『羅生門』—教科書の注記を中心として—」がある。甲斐は、文学教材の教材研究が作品論に偏っている点を指摘し、次のように述べている。

現行の教科書は一面ではことばに関する単元に力を注ぎ、巻末付録にもことばのきまりなどに十分なスペースを提供していながら、他面、文学教材などではもっぱら、いわゆる文学性に重きが置かれ、言葉に対する配慮が欠けているように思われる。

そこで甲斐は、三種の教科書⁽²⁾を資料に、「羅生門」の注記に
関し、形式と数量の観点から考察を試みた。そして、「注記
の現状を知ることとは、とりもなおさずその作品の読み
の現状を見るということ」であるとし、注記研究の重要性を
説いた。

この他、「羅生門」の注記に着目した論考に、山森泉
(二〇〇六)「教科書所収の『羅生門』における脚注の比較―
学生の語彙理解に関する一考察―」がある。山森はこの論考
の中で、次のような比較を行っている。

- ①学習指導要領の改訂に合わせて編纂された同一出版社の教
科書四冊に所収された「羅生門」の脚注の時代別の比較
- ②平成十八年度使用の五社の教科書における「羅生門」の
脚注語彙に関する比較
- ③同一出版社の脚注以外の語句の扱いの時代別の比較
- ④平成十八年度の出版社別の、注意を促す語に関する比較

以上の事柄を比較・分析することにより、山森は「現場の
教師たちが生徒の語彙力低下を実感しているにもかかわらず、教科書における脚注は語彙力低下に対応しているとは言
いがたい現状である(一四八頁)」、また「注意すべき語句の
比較では教科書間の一致率が低く、共通の教材でも語彙の捉
え方に大きな差がある(一四八頁)」と述べる。山森の調査
から、「羅生門」にどのような脚注を付けるかは、高校生の

語彙理解の実態を、さらに調査・分析し、把握する必要があ
ることがわかる。

注記の研究と共に、「羅生門」の語彙全体を調査した研究
に、河内昭浩(二〇一三、二〇一六)「教材『羅生門』の語彙
研究」、「語彙に注目した『羅生門』の指導」がある。河内
(二〇一三)では、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉
均衡コーパス」(BCGJ)とBCGJ内のプロジェクト「教
科書コーパス」を利用して、「羅生門」の語彙の分析を行っ
ている。河内の論考では、まず山森(二〇〇六)で使用され
た平成十八年度使用教科書会社五社の語注を取り上げ、流通
実態(図書館)サブコーパス⁽⁴⁾の語彙レベル(度数降順の累積
使用率によるa～eまでの段階 以下「レベル」LB)と教
材「羅生門」の語注の相関関係を考察する。そして、語注の
多くが「レベル」LBの下位に相当することを示す。次に、
教材「羅生門」全体の語彙と「レベル」LBとの相関につい
て調査し、「羅生門」の語が全体に「レベル」LBの上位に
位置することを示し、上位語の多さ、すなわち現代でも使用
頻度の多い語が使用されていることが、「羅生門」が定番
教材として長く読み継がれていることとは無関係でないと思
われる(一九七頁)」と推測する。また、「レベル」LBの下
位に分類される語彙の中に「教師が、生徒が「知らない」な
どとは思えないもよらない語彙が見られる」とし、「教師がその

ことを見過ごしているために、生徒の読解に支障をきたしている恐れがある(一九七頁)」と述べる。

河内(二〇一六)では、学習指導要領の変更に伴い、改訂が行われた現行の教科書九冊から、新たに「羅生門」の脚注欄の語彙を取り出し、これらを注釈語句、学習語句に分類する。そしてまず、注釈語句に関し、各教科書における異なりを分析し、その上で脚注欄に置くべき語彙の選定に関する提案を次のように示している。

①作品固有の難解語：注釈がないとその作品の読解に支障がある語。例えば「黒洞々たる夜」は、下人の心情や作品の主題につながる語である。しかし一般の辞書には掲載されていない。こうした語は注釈を施す必要がある。

②文化語：作品の読解に必要とまではいえなくても文化度の高い語。

五七頁

脚注欄の語彙選定では、河内(二〇一六)でも使用した「現代日本語き言葉均衡コーパス」(BCGWJ)における出現状況を客観的指標としている。結果として、脚注語彙の中でも、注釈語句については「現代語での流通が少なく、古典由来の語句が多く、また教科書の違いによる差異も小さい」とする。一方学習語句に関しては、その選定方針が教科書によって

異なるとし、学習語句の選定を次のように分類する。

③理解語：学習者にとって難解だが、社会生活を営む上で理解の必要があると考えられる語句。かつ、作品読解において意味調べの学習が必要であると考えられる語句。

④表現語：社会生活を営む上で必要性が高いが、日常的に学習者が表現に使用する機会は少ない語句。短文作成などの学習が有効だと考えられる語句。

五八頁

また選定基準を

・「図書館サブコーパス」d・e + 「Yahoo!知恵袋サブコーパス」d・e ↓理解語
・「図書館サブコーパス」a・b + 「Yahoo!知恵袋サブコーパス」d・e ↓表現語

五九頁

に分け、それぞれの語を「羅生門」の中から具体的に抽出している。

さて、本稿で目的とする副詞「全然」は、河内(二〇一六)の調査の中では「レベル JB」の a に含まれる、いわゆる使用頻度の高い語とされる。このため、注記や学習語句として取り上げられることはない。しかし、「羅生門」の「全然」の用法は、現代の規範意識とは異なり、注意を促す必要が

ある。

五 「羅生門」に見る「全然」の意味

「羅生門」の「全然」の用法は、近年よく取り上げられる「全然」+肯定」に関する問題と深く関わっている。「羅生門」の中で、「全然」は次の二か所に使用される（『精選国語総合』大修館書店より引用。引用部の傍線は筆者による。以下同。）。

1. 下人は初めて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということ意識した。

靖 2. そうして、また、さつきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動くこうとする勇氣である。

長 1. の場面は、老婆を捕らえた下人が老婆の生死がすべて自分の意のままに動くということを知り、老婆に対する憎悪の心を冷ましてしまったという場面である。2. は、下人が老婆を捕らえたときの正義から生まれた勇氣とは真逆の方向の勇氣、すなわち盗人になるという道へ踏み出す勇氣が生まれたという場面であり、どちらも、下人の心情が大きく変化する「読み」の学習に重要な場面である。この二つの場面の「全然」は、「全然」+肯定」で使用されており、現在では違和感が持たれる用法である。

六 副詞「全然」の用法に関する規範意識

近年、若者が「全然大丈夫」「全然いいね」などの「全然」+肯定」を使用することが指摘されているが、その一方で、先に述べたように「羅生門」で使用される「全然」+肯定」の用法には違和感を持つ学生が多い。筆者は、大学の授業「日本語学」の中で、「全然」の用法を取り上げ、現代の大学生が「全然」の使用に対し、どのような規範意識を持っているかという調査を行っている。調査法は、明治・大正期中で「全然」の使い方が正しいと思うものには○、間違っていると考える場合は×、判断が付かない場合は△を付けて下さい。」と問うものである。例文は次の八つである（新野直哉（一九九七）「全然」+肯定」について」で取り上げた用例を参考に作成した）。

- ①発想が全然違う。
- ②相手を全然無視する。
- ③身元は全然不明だ。
- ④心身は全然健康だ。
- ⑤形勢は全然有利だ。
- ⑥全然新たな基準を決める。
- ⑦全然その趣旨に賛成である。

表2 「全然」+肯定に関する調査 (2011) (32名)

使い方 全然の用法	正しい	判断が 付かない	間違い
①発想が全然違う。	32	0	0
②相手を全然無視する。	0	5	27
③身元は全然不明だ。	3	10	19
④心身は全然健康だ。	3	6	23
⑤形勢は全然有利だ。	5	5	22
⑥全然新たな基準を決める。	1	1	30
⑦全然その趣旨に賛成である。	5	5	22
⑧方針は全然同一である。	2	8	22

表1 「全然」+肯定に関する調査 (2016) (32名)

使い方 全然の用法	正しい	判断が 付かない	間違い
①発想が全然違う。	30	1	1
②相手を全然無視する。	0	2	30
③身元は全然不明だ。	3	6	23
④心身は全然健康だ。	7	6	19
⑤形勢は全然有利だ。	7	7	18
⑥全然新たな基準を決める。	2	2	28
⑦全然その趣旨に賛成である。	7	3	22
⑧方針は全然同一である。	2	6	24

⑧方針は全然同一である。

結果は表1に示す。尚、二〇一一年に行った同様の調査結果(表2)も示しておく。

この結果から、①の用例以外は、間違っているという学生が多いことがわかる。現代では「全然大丈夫」「全然いい」「全然OK」という「全然」+肯定」が使用されるが、その一方で、明治・大正期に使用された「全然」+肯定」には違和感を持つ学生が多く、本調査の結果からも、規範としては、やはり「全然は否定と結びつく」という意識を持っているといえよう。

七 「全然」+肯定」の用法に関して

「全然」の用法に関しては、近年様々な論考がなされている。新野直哉(二〇〇〇)「近年の、「全然」+肯定」関係の文献について」では、副詞「全然」+肯定」に関する三〇近くの論考を年代順に記している。研究の流れは、学校教育の中で規範意識として育てられた「全然は否定と結びつく」副詞であるということが迷信であり、明治から大正、昭和の前半までは、「全然」+肯定」が普通に使用されていたこと、戦前から戦後にかけて否定と結びつく意識が生まれたこと、但し、現代の「全然」+肯定」は、明治・大正時代の使用と

は趣を異にすることなどが述べられている。その後も「全然」に関する論考は進み、最近では、「全然」の用法に対する規範意識の変化が、いつごろから生まれ始めたのか、また個別の人物の意識変化から探る研究や、あるいは中国語における「全然」の使用に関する論考なども見られる。このように「全然」の用法に関する研究は、現在も進行中である。そして、国語辞書の語釈に影響を与えている。

八 国語辞書における「全然」の記述

近年の小型国語辞書二書を見ると、「全然」は次のように記されている（傍線は筆者による）。

①《下に否定的な表現を伴って》全面的な否定を表す。ちつとも。まるで。まったく。「意味が—分からない」「—いいところがない」「そんな心配は—不要だ」「—だめだ」もと肯定表現で、まったく、まるっきりの意でも使った。「三人が—翻訳権を与次郎に」委任する事にした（漱石）②「俗」程度の差が明らかであるさま。断然。「こっちの方が—大きい」「私よりも—若く見える」③「俗」（否定的な状況や懸念をくつがえす気持ちで）全く問題なく「—平気だよ」

『明鏡国語辞典』第二版（二〇〇九）

（副）①「下に打ち消しや「ちがう・別だ」などのことが続いて」すこしも。まるで。「何があったか—知らない・あいつは—だめだ」②完全に。すっかり。「—言いがかりというものだ・鼻が—つまっちゃってるね」▽①の用法だけが本来とされることが多いが、戦前から①②の用法が共に使われた。戦後①が特に広まった③「話」ほかとくらべて、断然。「いつもの授業とちがって—楽しかった」④「話」心配する必要がない、問題がない、ということを表わす。「この服、変じゃないかな」「ううん、—かわいいよ」・「行ってもいいですか?」「—来てくださーい」

『三省堂国語辞典』第七版（二〇一四）

（副）「否定表現と呼応して」あらゆる点から見て、その否定的な状態が認められる意を表す。「—変わらない／—なっていない／—だめだ／このところ売上げが—だ（＝まったく良くない）」「古くからあった否定表現を伴わず「非常に」の意を表す用法も最近は多くなった。例、「—おもしろい」

『新明解国語辞典』第七版（二〇一三）

辞書による書き方や考え方の違いはあるが、傍線に示したように、各辞書とも、「全然」が古くは肯定文にも使用されていたということが記されている。同じ辞書でも『明鏡国語

『三省堂辞典』初版(二〇〇三)では傍線部の記述はない。『三省堂国語辞典』第六版(二〇〇八)では、傍線部は「②完全に。すつかり。」「支配されている」とあるが、▽以下の□内の記述はない。また『新明解国語辞典』第六版(二〇〇五)では、傍線部は「〔俗に、否定表現を伴わず「非常に」の意にも用いられる。例、「―おもしろい」〕と書かれている。このように、以前の辞書には、古く「全然」+肯定の用法があったということは書かれていない。これらの刊行年が異なる辞書の内容比較から、近年の「全然」に関する研究が、現代の辞書の語釈に影響を与えているということができよう。しかしそうはいつても、「全然」の辞書の語釈は、やはり筆頭に否定と結びつくという意味を載せており、「全然」が否定と結びつく規範意識は、いまだに根強いことがわかる。一方、明治期の漢語辞典には、「全然」の意味は次のように記されている。

・イツモカワラズ

『漢語文章大全漢語弁解』(明治九年)

・スキト。其マ、

『雅俗漢語訳解』(明治十一年)

・マルで。マルツキリ

『漢語故諺熟語大辞林』(明治三十四年)

・マルデノコラズ

『新編漢語辞林』(明治三十七年)

右記のように、明治期の漢語辞典の中では、「全然」が否定と結びつく副詞であると記されているものはない。先に述べたように、現代の辞書も、近年では「全然」が古くは肯定文とも結びつく用法が一般的であったことをうたっている。しかし「六 副詞「全然」の用法に関する規範意識」のアンケート調査結果から見ると、やはり現代では「全然」が否定と結びつく語という規範意識が強く働いていることがわかる。つまり、近年の研究は国語辞書の記述に影響を与えていても、学校教育における国語の語彙指導の中には、十分に生かされていないということがいえよう。

九 明治・大正・昭和前期の「全然」の用法の指導法

では、実際に「羅生門」の語彙指導の中で、「全然」の用法をどのように指導していけばよいのだろうか。ポイントは、明治から昭和前期には「全然」が肯定文にも否定文にも一般的に使用されており、現代のように「否定と呼応する」という規範意識がなかったと理解させることである。

そのために、まず「羅生門」の「全然」が使用される場面で、「全然」の用法に対し注意を促す必要がある。そこから、同時代の作品の「全然」の使用を提示し、「全然」+肯定」が、

当時の一般的な用法であったことを確認させる。例えば、次のように明治期から昭和前期の小説に見る「全然」と肯定文、否定文の用例を用意しておき、まず芥川龍之介の他の作品の「全然」の用例を提示する。

①彼等は、それを全然五位の悟性に、欠陥があるからだと、思っているらしい。

『芋粥』大5

②不幸にして近江屋平吉には、全然さう云ふ意味が通じなかつたものらしい。

『戯作三昧』大6

次に、明治から昭和前期までの他の作家の「全然」の用例を提示する。

③人間の用うる国語は全然模倣主義で伝習するものである。

④但し全然分らんでは気がすまんから勝手な註釈をつけてわかつた顔だけはする。

夏目漱石 『吾輩は猫である』明38

⑤若し女性が今の文化の制度を肯定して、全然それに順応することが出来たとすると

⑥真四角な建築物一つにもそこに個性の表現が全然ないという事は出来ない。

有島武夫 『惜しみなく愛は奪う』大6

⑦私には今までとは全然異つた意味を持つようになり出したのであるうか？

堀辰雄 『風立ちぬ』昭11〜12

⑧数人のものが懐中電気を照らしながら、出てくるのには全然気がつかずにいた。

堀辰雄 『美しい村』昭7

このように「羅生門」の「全然」の用法に注目させた上で、芥川の他作品①②に見るような肯定文・否定文の「全然」の用例を示す。さらに、③④⑤⑥⑦⑧の明治から昭和前期の肯定文・否定文に見られる「全然」の用例を提示すると、「全然」が当時、肯定文にも否定文にも使用される語であったことの説得力が増すものと思われる。

一〇 文学教材における語の指導

以上「全然」を例に、「羅生門」の語彙指導に関し述べてきた。教材としての「羅生門」は、現代文学のジャンルに分類されているが、現代とはやはり異なる時代の作品として、語彙指導を行う必要がある。それも、現代も使用頻度が高く、一般に使用されている語が曲者である。現代においても過去においても使用されている語の場合は、現代の意味や用法をそのまま当てはめず、当時の視点に立ってテキストを読み解

いていく注意が求められよう。

今回は「全然」の用法を例として、「羅生門」の語彙指導を述べてきたが、「羅生門」の中には、まだ指導すべきと考えられる語が見られる。その例として「足踏み」「鴉（からす）」を挙げておく。

「足踏み」は、河内（二〇一六）で理解語として抽出された語彙に含まれており、河内が調査した九冊の教科書には、学習語句として取り上げられていない語である。「羅生門」の中で、この「足踏み」は、地震や辻風、火事や飢饉により、さびれてしまった洛中の「羅生門」の様子を述べる場面に使用されている。

日の目が見えなくなると誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

ここで使用される「足踏み」は、『日本国語大辞典』二版（二〇〇一）の「⑦ある場所や家などに足を踏み入れること。訪問、でいり。」の意味にあたる。「足踏みをしない」で使用されることが多く、用例には「隠者は人間へは足ぶみをせず」（『中華若木詩抄』一五二〇頃）、「此以後此里へ是を恥て、永く足踏（アシブミ）し給わぬやうに」（『傾城色三味線』一七〇一）、「宗次郎は、お増の許へ足踏（アシブミ）をせず」（『春色英対暖語』一八三八）が見られる。これは、現代ではほとんど使用されていない用法である。「足踏み」

自身は理解語であっても、現代では、「足踏みをしない」という慣用表現は、ほぼ目にする機会がない。従って「足踏み」に関しては、「足踏みをしない」という慣用表現として取り出し、これを指導する必要がある。

「鴉（からす）」に関しては、表記の面から注意を促す必要がある。「鴉（からす）」は、教科書によつては「からす」と平仮名で表記される。筆者が調査した二十種類の教科書の中では「鴉（からす）」が十一種、「からす」が九種であった。「羅生門」に見るカラスは「鴉（からす）」と表記すべきと考ええる。「羅生門」のカラスは、次のように羅生門に捨てられた死人の肉を、群れをなしてついでついでにくるといふ場面に登場する。

その代わりまた鴉がどこからか、たくさん集まって来た。昼間見ると、その鴉が、何羽となく輪を描いて、高い鴉尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたように、はつきり見えた。鴉は、もちろん、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。

日本に生息するカラスには、大きく分けて「ハシブトガラス」と「ハシボソガラス」があり、「ハシブトガラス」と高い木のある場所に住み、群れをなす習性がある。またハシボソガラスより肉食系とされる。「鴉」の表記は主に「ハシブトガラス」を指す。群れをなし、死人の肉を食らう、その

カラスの姿をもって、芥川は「鴉」と表記したのであるまいか。とすれば、「からす」という平仮名では、場面の不気味さを十分に表すことはできない。教科書に作品を載せる場合、作者の表記に込めた意味を損なうことのないよう、表記を決定するべきであろう。そしてまた、作者が表記にこめた意味も含め、文学教材の「読み」の指導は行われるべきものと考ええる。

一 おわりに

今回は文学教材の語の指導における注意事項を、「国語総合」収録「羅生門」の「全然」から考察した。文学教材の中で語を指導する場合、まず作品が書かれた時代と当時の語の用法に注意する必要がある。また単体の語ではなく、慣用的な表現として、現代と使用の違いはないかどうかを確認する必要もある。

表記に関しても、作者は表記に意味を込めている場合がある。教材として取り上げる際、読みやすさも必要であろうが、表記を改変することにより作者の意図が伝えられなくなってしまう。文学を教材として取り入れる場合、原本の内容を損なわぬよう細心の注意が必要であると考える。

(教授 日本語学)

注

- (1) 佐々木秀穂(二〇一一)「授業を通して更新される作品のよみ」『羅生門』(きりぎりす「老婆説」をめぐって)(全国大学国語教育学会発表要旨集 一一二)、悉知由紀夫(二〇一五)『羅生門』「下人の行方」と「下人の心」―「まだ燃えてある火の光」をめぐって―(国語論集 12) 等。
- (2) 甲斐の調査した教科書は次の通りである。「新編現代国語改訂版 1」(三省堂)、「現代国語 二訂版 1」(筑摩書房)、高等学校現代国語改訂版 1(中央図書)
- (3) 田中牧郎・近藤明日子・平山充子(二〇一一)「教科書コース」、『特定領域研究「日本語コース」言語政策報告書 言語政策に役立つコースを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』
- (4) 注 3 に示した「教科書コース」の語彙表には、メディア・ジャンル別の「語彙レベル」が示されている(度数降順の累積使用率による a ～ e までの段階)。具体的には流通実態(図書館)サブコースパスに含まれる書籍、生産実態(出版)に含まれる書籍・雑誌・新聞、非母集団(特定目的)サブコースパスに含まれる Yahoo! 知恵袋・Yahoo! ブログ等。
- (5) 河内の調査では注釈語句の異なりは四三語。
- (6) 河内の調査では学習語句の異なりは五七語
- (7) 具体的な語は次の通りである(傍線の語は学習語句一覧にないもの)。「理解語(名詞)」暮れ方、雨やみ、仏具、箔、日の目、足ぶみ、刻限、格別、衰微、余波、夕闇、飢え死に、横着、大儀、雨風、中段、うみ、ただ者ではない、腐乱、白髪頭、暫時、床板、語弊、喉仏、存外、干し魚、冷然「表現語(名詞・形容詞・形容動詞)」積み重ねる、転がる、追い出す、うかがう、見上げ

る、据える、こねる、微か、つぶやく、交じる、顧みる、縮める、突きつける、険しい、のぞき込む、見回す、薄暗い、あえぐ、おぼろ、飛び上がる、つまづく、明白、通りかかる、しがみつく、うずくまる、燃え上がる、歩み寄る、うめく、さえる、冷やかか 河内(二〇一六)の五九頁下段―六〇頁上段参照

(8) 「全然」+肯定」に関する近年の研究史概観『現代日本語における進行中の変化の研究―「誤用」「気づかない変化」を中心に』(二〇一〇)一四六頁―一四九頁参照

(9) 梅林博人(二〇一三)『古川ロッパ昭和日記』における副詞「全然」の用法―言語変化の過渡期における個人の使用実態―『表現研究』96、新野直哉(二〇一三)「全然」に関する国語学者浅野信の言語規範意識―昭和一〇年題を中心に―『表現研究』97、橋本行洋(二〇一四)「全然」の「迷信」に関する通言的考察『近現代日本語における新語・新用法の研究』等

参考文献

関口安義(一九九九)『羅生門』を読む―作品論と教材論―小沢書店

田中 実(一九九六)「批評する(語り手)―羅生門」『国語と国文学』東京大学国語国文学会編『文学の力×教材の力』教育出版(二〇〇一)所収

甲斐睦朗(一九七三)「教材研究『羅生門』…教科書の注記を中心として」『国語教育研究』(20) 広島大学教育学部光葉会

山森 泉(二〇〇六)「教科書所収の『羅生門』における脚注の比較―学生の語彙理解に関する一考察」『北陸学院短期大学紀要』(38) 北陸学院短期大学

河内昭浩(二〇一三)「教材『羅生門』の語彙研究」『安田女子大学紀要』(40) 安田女子大学

河内昭浩(二〇一六)「語彙に注目した『羅生門』の指導」『解釈』(62) 解釈学会

新野直哉(一九九七)「『全然』+肯定」について『現代日本語における進行中の変化の研究』第二章第一章「『全然』+肯定」の実態と「迷信」ひつじ書房(二〇一三)

新野直哉(二〇〇〇)「近年の『全然』+肯定」関係の文献について『現代日本語における進行中の変化の研究』第二章「『全然』+肯定」に関する近年の研究史概観」ひつじ書房(二〇一三)

調査資料

「国語総合」(平成二十四年三月五日検定済)

1. 精選国語総合 大修館書店 (平成二十六年四月一日発行)
2. 新編国語総合 大修館書店 (平成二十六年四月一日発行)
3. 国語総合 現代文編 大修館書店 (平成二十六年四月一日発行)
4. 精選国語総合 三省堂 (平成二十六年三月三十日二版発行)
5. 明解国語総合 三省堂 (平成二十六年三月三十日二版発行)
6. 高等学校国語総合 現代文編 三省堂 (平成二十六年三月三十日二版発行)
7. 国語総合 桐原書店 (平成二十六年二月二十五日発行)
8. 精選国語総合 東京書籍 (平成二十六年二月十日発行)
9. 新編国語総合 東京書籍 (平成二十六年二月十日発行)
10. 国語総合 現代文 東京書籍 (平成二十六年二月十日発行)
11. 高等学校国語総合 第一学習社

12. 高等学校新訂国語総合 現代文 第一学習社
(平成二十六年二月十日発行)
 13. 精選国語総合 現代文 明治書院
(平成二十六年二月十日発行)
 14. 高等学校 国語総合 明治書院
(平成二十六年一月二十日二版発行)
 15. 新編国語総合 言葉の世界へ 教育出版
(平成二十六年一月二十日二版発行)
 16. 国語総合 教育出版
(平成二十六年一月二十日発行)
 17. 精選国語総合 現代文編 筑摩書房
(平成二十六年一月二十日発行)
 18. 国語総合 筑摩書房
(平成二十六年一月二十日発行)
 19. 国語総合 現代文編 数研出版
(平成二十六年一月十日発行)
 20. 高等学校国語総合 数研出版
(平成二十六年一月十日発行)
- 国語辞書
- 『明鏡国語辞典』初版(二〇〇三)、第二版(二〇〇九) 大修館書店
- 『三省堂国語辞典』第六版(二〇〇八)、第七版(二〇一四) 三省堂
- 『新明解国語辞典』第六版(二〇〇五)、第七版(二〇一二) 三省堂
- 漢語辞書
- 『漢語文章大全漢語弁解』(明治九年)
- 『雅俗漢語訳解』(明治十一年)
- 『漢語故諺熟語大辞林』(明治三十四年)
- 『新編漢語辞林』(明治三十七年)